

健康とその戦略

■ 複合災害 ■

～ 4 ～



石井 正三氏

コロナ禍世界に冷水

ヒューマンなドラマ美しい

様々な意見や思いが交錯する中で、コロナ禍のため一年延期されていた東京オリ・パラ2020大会が遂に開催された。基本的に社会との接点を少なくする無観客試合という配慮の下での、異例な運営になった。

医療関係者の一人として私もこの時点でのオリンピック開催には慎重論の方だったが、世界のトップアスリート達が繰り広げるヒューマンなドラマは美しいし、魂に響くものがある。

昨年なら金メダルに手が届いていたバドミントンの桃田賢斗選手が、予選で思わぬ敗北を喫してしまった。初速180km/Hのスマッシュに反応し、コートの隅々までミリ単位の感覚が研ぎ澄まされ、いくつもある打点から最善の反応をする。他にも期待や自負に叶わなかった多くの

選手達がいる。コロナ禍における一年延期は、アスリートたちにとつて、それほど大きい変化になった。コロナ禍はそれくらい、世界の交流に冷水を浴びせ、地域間や地域内の連携もたくさん傷つけた。そんな中での四回目の非常事態やまん延防止宣言になっている。

過程の中に学びある

私も医学部時代バドミントン部だったので、選手達の無念さが少しは分かる。チャレンジして成功しなかったアスリートを競技仲間として褒め称え、駆け寄ってくるスケートボードのシーンは心に残るものだ。メダルは目標ではあっても、人生の学びを得る機会はその過程の中にもたくさんある。

ところで、地球温暖化というところ、一本調子に気温が上がるイメージだが、実際には平均気温が上昇しながら、それぞれの時点での天候はバラつく。小糠雨、霧雨、五月雨、驟雨、土砂降りと、風情も表現も多様な雨の降り方があったのに、最近は熱帯地方で遭遇するような豪雨が増えていく。線状降水帯となると、これが途切れずに続く。

さらに、先日見つけたのは「天氣の川」という表現。例えば平均気温が一・五度くらい上昇すると、移動してくる大きな空気の塊にはこれまでにない夥しい水蒸気が含まれ、大きな川の帯のようにやって来て、大雨を降らせることになるという。

近海で温まってにわかには台風が成長して上陸するのも、熱帯地方の現象だ。こんな変化を「気象変動」と表現し、災害事象のように激甚化する天候が「気象の極端化」と呼ばれる。自然災害の中で、最近では毎日の天候も易々と災害状況になるのだ。

地球の温暖化が原因か、国内外で災害が相次ぐ。いわき地方も例外ではない



俵屋宗達や尾形光琳の傑作「風神雷神図」に見るように、日本人は自然と共に過ごし、雷は、自然現象の中で大ナマズが起す地震の次に恐れられてきた。

古事記の神話では、古来、雷さまは「武甕槌大神」と崇められ、ご神体は茨城県の霞ケ浦のほとり、鹿島神宮にお祀りされている。

先日、思い立って日帰りで参拝に向かった。以前に参拝した香取神宮も古来の歴史を刻んで立派だったが、今回この両神宮に共通する「要石」を拝みながら、古来の知恵の深さに改めて驚かされる。日本列島は中部地方を中心



帰途、経験したことのないような大音響、そして激しい雷、豪雨。だが、自然はしばらくすると、夕日の中に見事な虹をプレゼントしてくれた＝筆者撮影

とした大地溝帯（フォッサ・マグナ）で二つに分かれるほかに、九州北部からこの茨城県南部まで横一文字につながる断層帯があつて中央構造線と呼ばれる。列島地下の裂け目は富士山から阿蘇山を巻き込みながら横に延びていて、二〇一六年の熊本地震もこの延長線上に起こつた。

鹿島・香取両神宮にある「要石」は、それを鎮め祈る東端の見事な位置極めになっている。三重県の伊勢神宮、そして「要石」を置く近くの大村神宮もその沿線になるといわれる。列島は富士山を中央に

照らされた虹の根元が前方の雲間に現れた。夕日の中の虹

人類、いくつもの 危機乗り越える 深かった古代人の知恵

は赤い部分が多い感じがした。無事に帰宅でき、鹿島神宮参拝は強烈な体験だったと感謝している。

後日、鹿島街道・走熊の鹿島神社に参拝して体験の御礼をした。古代からのいわきと鹿島神宮とのつながりにも思いを馳せる機会になった。

そんな風に踏みとどまっているだけでは新しい展望は見えてはこない。この時この場所で、流れにしっかりと対応して精いっぱい頑張り続け、なんとか生き延びた上でその先が次第に見えてくる。ワクチンは予防の方法、これに治療が出てきてようやく、終息が見え始めるだろう。

東日本大震災と津波、そして原発事故という世界で初めての「複合災害」を経験した。いわきは、災害先進地だ。一緒に頑張る方法は身に付いている。

いくつもの都市が巨大な廃墟となって発掘されるまでには多くの理由があるだろうが、戦乱に加えて天変地変や大規模感染症も原因となっただろうと想像される。そんな危機を、地上の生命や人類はいくつも乗り越えて来たのだ。その中で大いなる自然の力を畏れ敬う心は、日本人々に受け継がれてきた伝統でもある。

前回も触れた「どれくらい我慢したら元に戻るのだろうか」というコロナ禍に関する質問の答えのゆくえは、一層明瞭になっている。

人間は大きな変化を経験をしたときに、緊急事態であっても日常の延長の中で対応しようとし続ける「正常性バイアス」という状況がある。

筆者プロフィール

石井 正三
(いしい・まさみ)

地域医療連携推進法人医療戦略研究所長・代表理事、長崎大学客員教授、ハートド公衆衛生大学院名誉武見フェロー、東日本国際大学健康社会戦略研究所長・客員教授、医療法人社団正風会理事長

